



michi



大乘たれ

私はいつもいう通り、大乘の悪は小乗の善であり、小乗の悪は大乘の善であるということであるが、この肝腎な点をどうも忘れがちな信者があるが、これは大いに反省してもらわなければならないのである。判りやすいえば、何事も大局的見地から觀察するのが大乘的観方である。それについてよく説明してみるが、一生懸命善と思っしてしていることが、結果において案外教えのお邪魔になる場合がある。しかもこういう人に限って自力的で人間の力を過信し、大切な神様の御力を不知不識忘れがちになっているのは、誰でも覚えがあるであらう。

また、こういうこともしばしば聞かされる。それはアノ人はずいぶん熱心にやっているが、その割合に発展しないのはどういいうわけであるのかと訝るが、これこそ小乗信仰のためであって、小乗信仰の人はどうも堅苦しく窮屈になるので、人が集まって来ないから発展もしないのである。しかも一番いけないのは、物事が偏りすぎるから常識を外れて、奇矯な言動をする。これを見て心ある人は、本教を低級迷信宗教と思ひ、輕蔑するようになるのでこの点大いに注意すべきである。ところがその反対に、それほど熱心に見えないようでも、案外発展する人がある。こういう人こそ本当に大乘信仰を呑み込んで実行するからである。

いま一ついいたいことは、小乗信仰の人に限って、他人の善悪を決めたがる。これも私は常にいうことだが、人の善悪を云々するのはほとんどない間違ひで、人間の善悪は神様以外分かるものではないのだから、人間の分際で善とか悪とかいうのは僭上の沙汰で、いかに神様を冒瀆することになるか分からないので、こ

れほど大きなご無礼はないわけである。なによりもこういう人に限って独善的で鼻が高く、人徳がないから発展しないばかりかときには碌でもない問題を起こしがちである。

この例として、終戦前の日本をみればよく分かる。忠君愛国の旗をかついで、全国民命がけでやったことが、アノような結果に終わった一事であって、この道理は大なり小なり何にでも当て嵌まる。なるほどその当時はみんな正であり善であると思つて行つたことだが、この善は小乗の善であるから、自分の国さえ良ければ人の国などどうなつてもいいという利己的觀念のためのその報いである。それについて私は先頃「世界人たれ」という論文を出したがつまりその意味であって、大乘の善すなわち世界的善でなくては、本当の善とはならないことを示したのである。勿論こういう考え方でゆけば、侵略戦争など起こりようはずがないから、アノような悲惨な目にも遭わず、今日といえども平和を楽しみ、世界から尊敬される国になつていたに違ひないのである。

別言すれば、愛にも神の愛と人間の愛とがある。すなわち神の愛は大乘愛であるから、無限に全人類を愛するが、人間愛は小乗愛であるから、自己愛や自分の仲間、自己の民族だけを愛するという限定的であるから結論は悪になる。この意味が分かつたとしてたら信者たるものは何事に対しても、大乘でゆかなければならぬいわけで、すなわち神の愛をしつかり胸に疊んでお取り次ぎすること、必ず好結果をもたらすに決っている。故にどこまでも神の御心を心とし、無差別的愛で臨む以上、誰しも快く接することができ、喜んで人が集まつて来るのは当然であり、発展するのは間違ひないことを、最近感じたままここに書いた次第である。



グランドキャニオン 吉田 博 大正14(1925)年
MOA美術館所蔵

吉田博は、こよなく自然を愛し、自然のなかにこそ美があるとし、自然とそれを直接見ることをできない人との間にたって、その美を表わすことを画家の使命としました。博の作品のほとんどは風景画で占められており、その取材範囲は、日本はもとより世界各国に及んでいます。通算7年以上に及ぶ3度の渡航を通して、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、インド、東南アジア、中国、朝鮮半島などを巡り、スケッチ（写生）を重ねました。そして、その写生をもとに「グランドキャニオン」をはじめとする数多くの海外風景木版画も手がけました。博は、著書『高山の美を語る』の中で「雄大というべきか偉観というべきか、グランドキャニオンほど日本に類のない、説明のしにくい風景はない」と述べています。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて	8
光輪祭(箱根)	14
八月度月次祭・祖霊大祭(熱海)	15
ファミリー錬成会	16
感謝奉告 本部 平山敦	20
シリーズ明主様(42)	23
聖地NOW	26
連載『神と繋がる明主様の食事観』(8)	29

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが}

心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

立秋とは名ばかりで、日本列島は依然として猛暑が続いています。私の住む熊本も先日（八月三日）観測史上初めての酷暑日を記録しました。

舗装路^{ほそうろ}は陽^ひにもえたぎり篠懸^{すずかけ}の

影^{かげ}のみしるく人足絶えける^{ひとあした}

（昭和8年7月20日 『山と水』より）

道路のアスファルト舗装が進んでいた当時の東京の、太陽の照り返しの厳しさが伝わってくるお歌です。

八月一日、箱根神仙郷では「光輪祭」熱海瑞雲郷においては「祖霊大祭」が厳かに斎行されました。

七月二八日の地震以来、不通になっていた熊本―博多間の新幹線が三一日に開通し、私も無事に聖地に参ることが許されました。救世神殿にて、常日頃の祖霊さま方の見護りに感謝を捧げ、今後も祖先と子孫が力を合わせてともに明主様のお役に立てるようお誓い申し上げます。

また、今回の地震により犠牲になられた方々の救いと被災に合われた方々の日常が一日も早く戻るよう衷心よりお祈りさせていただきました。

特にこの祖霊大祭に続き、お盆、お彼岸があります。祖霊さま方は、今年是我が家の子孫は、どんな迎え方をしてくれるのだろうかと心待ちにしておられます。そして何よりも子孫の徳積みこそが祖霊の向上、救いにつながるのですから、この機会にしっかりと家族協力して取り組みたいものですね。子供や孫と一緒に墓参りや家庭でのお祀りをさせていただくことが、信仰継承への大切な歩みになると思います。

「令和八年熊本地震」と名付けられた今回の大規模地震。私自身も一〇年前の記憶が一瞬にしてよみがえる感じでした。

今日（八月五日）現在も余震が続いています。犠牲になられ

た方々三八人、約一万二千棟以上の住宅被害、そして約八千三百人以上の方々が避難生活を強いられています。停電や断水も続いています。車中泊をしている方々の健康被害も心配です。私たち一人ひとりにできることは限られているかもしませんが、ともに日々お祈りさせていただきましよう。

八月というと、やはり先の大戦に思いが至ります。そして、日本人が忘れてはならない日があります。それは、終戦に至る六月二三日、一九万人の犠牲を伴い迎えた沖縄戦終結の日。そして八月六日、一瞬にして一四万人の方が犠牲になった広島原爆の日。続いて、七万余人の尊い生命が奪われた八月九日長崎原爆投下の日。さらに、軍人、軍属、民間人併せて三二〇万人にのぼる犠牲者を出して、八月一五日終結した第二次世界大戦終戦の日です。今では戦没者の霊をお慰めする日として、私もこの四つの日には、毎年心を込めて祈りを捧げております。

明主様は『世界人たれ』『天国の礎』宗教下¹³⁰頁のみ教えの中で、「(前略)自分の国さえよけりや、人の国などどうなつてもいいというような思想がある限り、到底世界の平和は望めないものである。これを日本の国だけとしてたとえてみても分る。ちやうど県と県との争いのようなものとしたら、日本内のことであるから、いわば兄弟同志の食み^は合いで簡単に片がつくに決っている。この道理を世界的に押し^ひつければいいのである。かの明治大帝の御製^{ぎよせい}にある有名な『四方^{よも}の海みな同胞^{はたら}と思う世に、など波風の立ち騒ぐらむ』すなわちこれである。みんなこの考えになれば、明日からでも世界平和は成り立つのである。全人類が右のよくな広い気持ちになったとしたら、世界中どの国も内輪^{うちわ}同士と

いうわけで、戦争など起こりようわけがないではないか(後略)」とお説きになつていらつしやいます。

来月九月一日には、熱海瑞雲郷にて「世界平和祈願祭」が執り行われます。病貧争絶無の世界を實現するとおっしゃった明主様の思いを胸に臨ませていただきましよう。

今月号では『実践の誓い』2参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。――の奉仕について明主様のお言葉・お姿を通して、基本に立ち返る気持ちで学んでいきたいと思ひます。今熊本では全国各地からの応援・支援の輪が広がっています。本当にありがたいことです。県外からの自衛隊の車両はじめ、警察・消防車両を見かける度に、頼もしく、思わず手を合わせてしまいます。また一般のボランティアの方々もたくさん来ていただけてます。

一昨年の元日に発生した石川県能登半島地震は、私たちの記憶に新しい災害です。「あの時は熊本の人にお世話になった、助けられた」と個人でキッチンカーを準備される石川県の方の姿がニュースで流れていました。困難な状況に立たされると、私たち日本人は思ひぬ力が湧いてくるのですね。いや日本人だけでなく、近隣諸国からも心温まる支援が届けられています。まさに、奉仕の中核精神である報恩感謝の営みが繰り広げられています。

世界各地で起きている戦争や紛争が恨み・憎しみの連鎖の結果であるとすれば、この災害における助け合い・支え合いの感謝報恩の連鎖が、世界中に広がることを願うばかりです。

ボランティアを辞書で調べると、「自発的に人が人として、ともに助け合って生きる社会を目指し、無償で自分の時間や労力を提供する行為」と出てきました。まさに尽くして求めない精神なのですね。

以前、主之光教団時代に、今日の実践の中に「すべて感謝で受けとめ、誠の奉仕を捧げます」を布教所の朝拝時に信徒の皆さまと奉唱していました。まだ健全だった頃です。私は当時シンプルな言葉だけど、毎日すごいことを唱えているんだと感じていました。

「景仰」の中に、専従者の間では布教三訓として語り継がれてきたお話があります。

恩は着せるべきものでない

私は昭和十六年四月一日、当時の資格を拝受して、いよいよ布教に専業することになりました。その時、「どのような心構えでやらせていただいたら、よろしいのでございましょうか」とお伺い申し上げました。

明主様は、『寝食を忘れて人を助けることです。しかし、恩は着るべきものであって、着せるべきものではない。いつも私と共同作業であることを忘れないことです。その心構えでやればよいのです』とご教示下さいました。

それ以来、このお言葉が私の布教信条となっております。

(布教師) (「景仰」 534頁)

厳しくも愛情あふれる、力強い明主様のお言葉ですね。明主様のご生涯は憐憫の情、利他愛の思いで貫かれているからこそ教団の発展が許されてきたのですね。

「景仰」の巻頭に『私というものと』『私の無信仰時代』という二つのみ教えが掲載されています。あとがきに、「教祖明主様のご遺稿中、『私の無信仰時代』は、未定稿、未発表のものであります」と記されていますから、当時の教祖伝編纂委員会が一番明主様のご性格、ご気性が表れているものと選ばれたのだと拝察いたします。

私の無信仰時代

いつかも書いたことがあるが、私の前半生は、しごく平凡なものであったから、詳しく書かなかったが、その後書き漏らしたと思う点も少なくないので、興味ある話題を少し書いてみようと思うのである。

それについて、私が妻を娶ったのは二十五歳のときで、妻は十九歳であった。私のところへ来て一年ばかり経ったころ、結核に罹ってしまったのである。そこで早速医師に診てもらったところ、医師の言うには、「この病気には薬がないから、まず空気の良いところへ転地して、気長に療養するよりほかに方法はない」とのことであった。ところが幸いにも、妻の実家は神奈川県金沢で、海岸ではあるからちょうどいいとして、母や兄、親戚なども口を揃えて、「この病気は伝染の危険もあるし、たとえ子供ができてでも遺伝するから(当時の学説)ぜひ実家へ帰した方がいい」としきりに勧めるので、私は一時はその気

になったが、よく考えてみると、どうも腑に落ちない気がした。というのは、一生を契つた妻が病氣に罹れば、なおさら親切に介抱してこそ人間の道であるのに、伝染の危険があるからとて実家へ帰すなどは、あまりに功利的考え方で、そんな薄情なことは、私にはどうしてもできない。一生涯苦楽をともにすべきが夫婦の道ではないかと堅く心に決めたのである。しかも幸いなことには、以前私が治った体験もあることだし、必ず治るに違いない。そのみか人間は正しい道を踏む以上、伝染するはずもないという確信が湧くのである。当時無神論者であった私として、そんな考えが湧くのは実に不思議でならなかった。それを聞いた医師も親戚の者も呆れてしまい、私を変わり者とさえ思ったのである。というわけで、そのときすでに肚の底には、信仰の種が蒔かれてあったのであると、宗教人となつてから判ったことである。そうして、私の経験上から菜食療法にしたところ、医療も受けず三、四カ月で治ってしまった。

それからこういうこともあった。そのころ、桂庵から雇った十六、七歳の娘があつたが、この娘が病氣になったので、房州の実家へ帰したところ、しばらくしてからヒョッコリ訪ねて来た。見ると真つ蒼な顔をしているので訊ねたところ、その後だんだん悪くなり、医師から重症結核と診断をされたので、周囲の者から嫌われ、しかも、赤貧洗うがごとき家庭なので、邪魔者扱いにされ、「働きに出ろ」と言われるのでまいりました」と涙ながらに言うので、私も大いに同情し、「そんな身体で働くなどは、とんでもない話だ。すぐ実家へ帰りなさい。その代わり食扶持と医療費を、お前の生きているあいだは、必ず送っ

てやるから」と言だったので、喜んで帰ったが、それから毎月確か十五円ずつ送ってやったと憶えているが、当時としては、そのくらいで充分であつたのである。

しかし、それだけの話なら情け深い人なら、世間になくはないが、これについて書きたいことがあるから、この話を挿入したのである。というのは、当時私の親戚、知人などは、よくこう言つたものである。「その娘の肺病が治る見込みがあるならいいが、あれでは死ぬに決っている。死ぬに決っている者を援けてやったところで、つまらないじゃないか。治ってから働いてご恩返しができるならいいが、そうでないとしたら、無駄な金をつかうだけで、つまらないじゃないか。早く止した方が利口だよ」と勧めるのである。そこで私は言つてやった。

「私は恩を着せて、代償をもらう気はいささかもない。人を世話して恩返しを期待するなどは一種の取引で、まるで恩を売るようなものだ。だから、そんなものは慈悲でもなんでもない。善人らしく見せる一種の功利である。ただ私は、あんまり可哀想で見えていられないからそうしたまでで、つまり、自然なんだ。私はそれで満足しているんだから、いいじゃないか。大きにお世話だ。なるほどあんた方からみれば、馬鹿と思うだろうが、馬鹿でもなんでも結構なんだよ」とマアこんなふうに言つてやったので、みんな呆れて黙つてしまったことがあつた。

このときの私も全然無信仰で、唯物主義のカンカンでありながら、まるで信仰者のような考え方なんだから、表面は無信仰でも肚の底は、すでに信仰者になつていたわけである。(未発表)

たいへん長くなりましたが、お若い頃からの明主様の見返りを求めないみ心、お姿が良く分らせていただけるので、敢えて全文引用させていただきました。

明主様と聖地に直結する会の日々の信仰活動は、信徒の皆さまの真心の奉仕によって支えられています。自分に与えられた身体、心、時間、金銭を精一杯大神様、明主様に捧げることに、私たちも恵みをいただき、向上が許されるのですね。昭和四三年に当時の教団から「御教え問答集」がシリーズで四巻発刊されました。1 おひかり 2 入信・教修 3 参拝 4 奉仕 です。かつて明主様に直接ご質問申し上げた際、いただいたみ教えの中から、また、それに関連したみ教えをもおり混ぜながら編纂されたものです。

私は学生でしたが、「景仰」と同じく母が三人分買ってくれたので、夢中で読みました。たいへん分かりやすく、布教現場でも随分と活用させていただきました。

今月は最後に、「御教え問答集」(奉仕編)の中から抜粋させていただきます、学びを深めていききたいと思います。

神に生かされている以上、役立つのが最上の道

——悪いことをしなければ、神様は罰せられないものでしょうか。

罰というより、人間は働くために神様から生かされているの

ですから、わるいことはしないといっても、ただブラブラしている人などは、それが罪になります。人間はやはり理想世界建設に役立つことをするのが最上で、そのために、それぞれの職業を与えられているのです。ですから、それに全力をつくすのがほんとうで、それによって転職使命を行うべきであります。そして、なおそのうえに、人を助けると罪の消えるのが大きいから霊層界はドシドシ昇り、歓喜の生活ができるようになります。そして、思ったとおり運命が開けるし、神様はごほうびをくださいます。

(昭和24年)

神業奉仕こそ神様はいちばんよろこばれる

——善事をして神様にお喜びいただきたいのですが、いかがしたらよろしいでしょうか。

よいこととはいかなる種類のものかはつきりしませんが、根本的には一人でも多く人を救うことに奉仕することが、いちばん神様はおよろこびになります。神様のお仕事に対し金銭奉仕をして、ご神業のお役に立てることも、およろこびになります。

(昭和24年6月5日)

功利的信仰と陰徳

——功利的な信仰から自己完成を念願する者も、人の救いに対してはよい結果をみるような場合がございますが、この者の死後の霊界に

おける状態はどのようなことになりますのでしょうか。

功利的信仰はもちろん、ほんとうのものではありません。こういう人の信仰は霊界では功績がないのです。功利的ということは、もうすでに、現界で報いられてることになるからです。たとえば、神社や仏閣などに寄進した場合、よく札を掲示しますが、あれは人からほめられ、すでに報いられることになりますから、霊界では報われるところが少ないのです。

(昭和23年10月24日)

奉仕の本義はどこまでも無償

——参拝、浄霊、奉仕とは信仰の基本行であると思われませんが、この奉仕の本義はどこにありますでしょうか。

奉仕という字は仕え奉ると書きますが、奉するという本来の意味は、神様や高貴な方々に物をお供えする、献上するということです。ですから、どこまでも他のために、自分のもの、あるいは労力といったものを無償で差しあげること、ことに、奉仕の真の意義があります。

感謝の誠は分相應の最大限度

感謝の誠を捧げる場合、仮りに金銭にしても、多い少ないは問わない。分相應の最大限度であればいいのである。神様

は何もかもご存じだから、無理をせずともお許しになるとともに、そのうえひとりでも多くの人を救い、信者をつくればなおさら結構であって、要は実行である。

いまひとつ肝心なことは、神様が命をくださるお目的は、その人をご神業に働かせるためであるから、それをさとして実行すれば健康はますますよくなり、幸福は何程でも恵まれるが、それを裏切るとしたら、せつかくの救いを自分から拒否するわけである。

(昭和28年8月27日)

人から感謝される人間たれ

——人間として、神様にご奉仕させていただく正しい態度をお教えください。

まず、人間として努むべきこと、履むべきことを違えず、つねに人から感謝されるようにし、そのうえ、己の天職使命をとおして神様の目的に従うべく、人生を全うすることです。そういう人に対して、神様はその恩賞として御ほうびをくださるのです。

(昭和24年)

まだまだ厳しい暑さが続きます。台風の動きも気になるところです。ともに被災地にも心を寄せながら、この難局を乗り越えてまいりましょう。

ありがとうございます。

水晶殿

水晶殿は、昭和二九（一九五四）年に明主様のご設計により、瑞雲郷の「景観台」に建てられた、ご在世最後の建造物です。「水晶」の名には、曇りのない理想世界を象徴する意味が込められています。

建設にあたっては、明主様自ら建物の向きや床の高さを検討され、昭和一九年九月に着工。全国から集まった信徒の献身的な奉仕により、わずか三ヶ月後の二月一日に完成しました。建物は直径約二二メートルの半円形という独創的な構造で、すべて明主様のご構想をもとに設計されました。眺望を心ゆくまで楽しめるよう前面には柱を一本も設けず、透明なアクリル板を採用した当時としては極めて斬新な建築で、完成後は建築界からも注目を集め、多くの建築関係者が見学に訪れました。

明主様は「決して独占することなく、一人でも多くの人々に天与の景勝を楽しんでもらいたい」と仰せられました。そのみ心のままに、水晶殿は信徒だけでなく、広く訪れる人々に開かれた憩いの場として親しまれています。



1953(昭和28)年、現在の水晶殿付近にて、建設現場を視察される明主様



水晶殿内部からの展望



建設中の水晶殿(昭和29年9月頃)



水晶殿全景

稲妻階段

救世会館正面玄関へと続く稲妻階段は、石段が稲妻のようにシグザグになっているところから、その名が付けられました。石垣や白い手摺、小判型の欄干らんかんに至るまで、すべて明主様ご自身が設計・デザインされたものです。約四千個もの石を用いた石垣は、隙間がほとんどないほど精巧に積み上げられ、一つひとつの石には丸みが施され、全体として美しい曲線を描いています。特に凹面の曲線は施工が難しく、専門家からも高い技術が評価されています。

また、欄干の小判型は一つひとつ寸法が異なり、階段や踊り場の形状に合わせて設計されています。明主様は、その完成を大変気にかけれ、出来上がりをご覧になった際には、造営に携わった親方へ「よかったね、あれは」と声をかけられたと伝えられています。さらに明主様は、階段の高さや幅についても、老人や女性、子どもまで誰もが歩きやすいよう、駅やデパートの階段を実際に歩いて参考にし、二代様にも階段を上がっていただきながら寸法を決められたと伝えられています。景観の美しさだけでなく、訪れるすべての方への細やかな心配りが息づく建造物です。



1949 (昭和24) 年頃、稲妻階段前にお立ちになる明主様 (右) と現在の稲妻階段付近 (左)



稲妻階段全景



祖霊さまに感謝を捧げ、ともにご神業推進を誓った



着々と建設が進む光明会館



箱根美術館の改修工事進む

永遠のいのちを幸せに生きる道を求めて

(箱根) 光輪祭

8月1日、光明神殿にて光輪祭を斎行。中島MOA理事長は、祖霊さまとともに明主様とのご面会が許されたことへの感謝を述べ、祖霊さまのお力添えをいただきながら、光明会館建設の総仕上げに歩みたいと述べた。また、政府の「骨太の方針2026」に初めて「統合医療」が明記されたことに触れ、ライフスタイルケアが地域を支える役割を担っていることを紹介。さらに、善徳を積み人々の幸せに尽くすことが祖霊さまへの孝行につながるとのみ教えに触れ、「永遠のいのちを幸せに生きる」明主様の人間観を広く伝え、新文明創造に向け、ともに歩みたいと述べた。



敬神崇祖を誓い、祖霊に感謝を捧げた



教祖記念室の展覧に見入る拝観者



ブラジルから来聖した信徒

(熱海)8月度月次祭・祖霊大祭

命を天国へ運ぶ信仰

8月1日、救世会館にて8月度月次祭・祖霊大祭が執り行われた。杉原いづのめ教団理事長は、祖霊さまへの感謝と霊界における向上を祈るとともに、敬神崇祖の生活を実践し、^{けいしんすうそ}積徳・積善に努めることを誓った。また、「運命は自由に作れる」のみ教えを拝し、善の種を蒔き、人助けに励む信仰実践が自らの運命を開くことを強調。「運命」とは「命を運ぶ」ことであり、神様から与えられた命を地上天国建設の使命に生かし、「命を天国へ運ぶ」歩みを重ねることが幸福な運命につながると述べ、祖霊さまとともに人類救済と平安郷建設のご用に歩みたいと呼びかけた。



春秋庵前にて記念撮影

ファミリー錬成会(京都 平安郷)

「いのち」を見つめ、学びを深める

八月八日、九日、第三回目となるファミリー錬成会を実施。二六名が参加した。今回のテーマは「いのち」。

立石代表は、明主様が目指された新文明の創造について、人間の生命の安全が保証される文明という視点から、自身の体験を交えながら「いのち」について考えるきっかけを提起した。

その後、参加者同士で「いのち」をテーマに語り合う座談会をはじめ、映像鑑賞や感謝奉告、講師による発表、絵本の読み聞かせなどを通して、さまざまな角度から「いのち」について見つめた。また、講師がAIを活用して作詞・作曲した「いのちのボタン」を歌詞カードとともに鑑賞し、作品を通して「いのち」について思いを巡らせたほか、信仰と日常生活についての発表も行われた。

九日は、いづのめ教団のご配慮により春秋庵に昇殿参拝が許され、講師から「いのち——明主様に求めて」と題して話があり、その後、「魂について考える」ワークショップや座談会を行い、学びを深めた。

終了にあたり立石代表は、今回の学びを家庭や地域の日常に持ち帰り、一人ひとりが周囲の天国化の核となっていくことを呼びかけた。参加者は一泊二日の学びを通して、それぞれ「いのち」と向き合い、新たな信仰実践に向かって平安郷を出発した。



信徒がファシリテーター（進行や話のまとめ役）を務めながら、ワークショップ形式の議論を展開



信徒による絵本の読み聞かせ



「いのち」をテーマに講師からお話



食後に笑顔で片づけ奉仕



和気あいあいと語り合う座談会



早朝の除草奉仕



各班から学びを発表

土の聖地・平安郷で過ごされた感想

- ◆ 楽しい時間を過ごさせていただき、晴れやかな気持ちでいっぱいです。温かな光に触れさせていただけたと思いました。
- ◆ 日常と違ってのんびり過ごすことができ、所々の生け花にも感動し、京都ならではの聖地の建物にも癒されました。
- ◆ 光に包まれて過ごすことで、光の呼吸を体得し、型を使えるようになりました。光の呼吸を使用してからは、物事をより広い視野でみる事ができるようになったと感じています。
- ◆ 心が浄まった気がしました。改めて浄霊は大切だと思いました。貴重な体験ができた、ためになる二日間でした。宿泊棟が洞窟のような雰囲気で、うきうきするくらい楽しい場所でした。
- ◆ 心が浄まり、身が引き締まる思いでした。また、普段は交流が難しい遠方の方や幅広い年齢層の方々との交流を通して、信仰、明主様に対する想いを聞かせていただいたことは、とても有意義でした。今までの自分にはなかった気付きが得られ、とてもためになったと感じました。
- ◆ 自分の気持ちに素直に、心穏やかに過ごさせていただいた二日間でした。「いのち」の「魂」について考え、心が軽くなる想いでした。
- ◆ 平安郷研修センターには、参拝席しか来ることがなかったのですが、研修棟を利用させていただき、構造、デザインが素敵で、そのきれいさに感動しました。春秋庵でのご参拝で、中へ入れていただけて、いづのめ教団職員から明主様ご事蹟のお話まで聞かせていた

だけで、良い経験になりました。

- ◆ 有意義な時間を皆さんと共有できたことを嬉しく思います。特に春秋庵の中で参拝させていただいたこと、明主様をより深く感じられ、また、新たに明主様のお役に立たせていただきたいと強く思わせていただきました。

- ◆ 春秋庵に初めて入らせていただけたことにうれしさと感動で、言葉で言い表せない思いをさせていただきました。ご参拝の時に拝読したみ教え「人間は想念次第」をいただいて、魂を浄めていただけたように思います。

- ◆ 春秋庵に初めて上がらせていただき、大弥勒御尊像様へご挨拶させていただけたことに感謝申し上げます。お庭の木々も暑さの中でも涼しさ清らかさを感じさせていただき、自分の沈んでいた心が軽くなったように思えました。聖地参拝は魂が向上し、浄めていただけるところだと改めて感じました。

学びの感想

- ◆ 誰しもがもつ心の動き、優越感と劣等感が戦争に結びつく。優越感高じるとエリート意識、選民思想に繋がっていく。世界中の人々が「世界人たれ」に基づいてワークショップを行うことを願う！
- ◆ 「いのち」について初めは難しいなと思っていました、分かりやすいスライドで少し理解できました。
- ◆ 魂……とても奥深く、言葉にするには難しいのですが、自分の心の奥底にあって、心と違ってもう一つ上の次元、自分の進む方向を導いてくれる羅針盤のようなものなのだと思います。

◆ 生きる意味を見失わないようにすることと、しっかり自分の個性を活かすことを大切にしようと思いました。やられてもやりかえさないようにすることで、平和で良い関係が作られるという考えも忘れないようにしたいです。

◆ このような鍊成会に参加させてくださった明主様に感謝の気持ちでいっぱいです。「いのち」がテーマでしたが、体験談から、信仰のすばらしさ、音楽や絵本という芸術のすこさ、自然のサイクルの尊さを理解できました。また、ワークショップや魂の話を通して、神性人間を目指そうと思いました。

◆ ワークショップは、自分の良くない想念と向き合い、これからのように取り組んで行くかを考える、とても良い機会でした。

◆ 今回は「いのち」がテーマで、とても勉強になりました。生活の中で、あまり魂というのを感じたことはありませんでしたが、今回の学びを通して、より魂というのを感じながら、これから生きていこうと思います。人によって魂の捉え方が違って、とても勉強になりました。

◆ いのち、魂の学びをいただき、これからの自分を見つめ直し、充実した人生を送りたいと思います。感謝の気持ちを忘れずに笑いのある人生を！

◆ 魂の曇りの解消は、誠の一字にあること、自分の心を見つめ直すことを学ばせていただきました。

◆ 「いのち」について、今まで深く考えず過ごしていましたが、鍊成会に参加させていただき、地球、自然、動物、人間、万物すべてに、いのち、魂があり、生き変わり死に変わり魂は永遠にいろんな型で続いていることを学びました。自分は神様の分霊として、想念を大事にし、神性人間に近づける努力をしたいと思いました。

その他

◆ 日々、魂を磨く努力をして、人事を尽くして神様にお任せする。最強の後ろ盾のある人生、いのち。

◆ ワークショップでセントラルグループで学んできたことを少しでも周りの人に伝えたいと思い参加しました。体験談などお伝えできる機会をいただけたことに感謝します。この一年で魂について学ぶ中で、神様の分霊が自分の中にあり、いつでも繋がっていて愛と光で包まれているという、安心感を得られています。本当に幸せだと感じているので、この魂について学ぶ活動を広めていきたいと考えています。

◆ 初めてワークショップをしましたでしたが、とても簡単でやり方が分かりました。頭の中が整理整頓できて良かったです。

◆ 魂を浄めるために前額と脳天の浄霊実践もしていきたい。学びや気付きをくださった時間、周りの方々との出会いに感謝。

◆ 浄化をしている私ですが、明日も透析に行きます。ありがたく感謝で透析をします。次回も来れますように祈っています。よろしく願います。

◆ 鍊成会に参加でき、学び、同じ想いをもつ仲間に出会える時間をいただけたこと、心より感謝申し上げます。座談会にて、グループでの活動のことなどを話すことも許され感謝いたします。

◆ 今回で三回目の平安郷ですが、何回でも来たいと思ってます。

◎ 参加者の皆さまから、多くの感想をお寄せいただきました。誌面の都合上、すべてをご紹介できませんが、ご寄稿くださった皆さまに心より御礼申し上げます。

感謝奉告

『ファミリー鍊成会での発表より』

明主様にいただいた“いのち”

本部 平山 敦

皆さまこんにちは。今年二月から本部事務局にて祖霊事務を担当させていただいている、平山敦と申します。改めてよろしく願いいたします。

昨年に続き今年もファミリー鍊成会に参加できました。そして何より、鍊成会そのものの開催を大神様、明主様にお許しいただき、皆さまと再び聖地平安郷でお会いできた喜びを、ひしひしと噛み締めております。

さて、今回は「いのち」をテーマにした鍊成会ということで、

体験を発表する平山職員

私も何か“テーマに基づいた発表をさせていただきたい”と思い、いろいろと考えた結果、やはり“自分が人生の中でいただいた奇蹟に関する体験を発表させていただくことが大切だ”と思いました。

しかし、今年から職員

としてのご用を許された以上、ただ体験談だけで終わるのはいかがなものかと思いました。そこで今回は、その体験談を掘り下げ、奇蹟の中でどう明主様を感じたか、今思えばそういうことだったのかという、ある意味一つの考察を発表させていただきます。お聞き辛い箇所もあるかと思いますが、よろしく願いいたします。

① 疑わなかった背景

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私は二〇一七年に世界救世教にご縁をいただき、入信をお許しいただきました。それまでの人生は、とても“生きている”と言えるような人生ではありませんでした。多額の借金を抱え、両親や祖父母の供養も放置しっぱなしでした。定職には就いていないものの、ただその日のご飯が食えるだけのお金を稼ぐだけ——まさにその日暮らして、生きがいもなく、死んでも同然のような毎日を送っていました。

そんなある日、私はインターネットで知り合ったSさんに小澤アケミ先生を紹介され、当時の集会所に案内され、ご神前に導かれて、初めてご浄霊を受けました。

その時、私は小澤先生から、次のように尋ねられました。「あなたは幸せになりたい？」と。不思議と戸惑いや迷いはなく、私は二つ返事で「はい」と答えました。

後になって一つ、“なぜ私はこの時、すんなりと入信を受

け入れられたのかな”と疑問が生まれました。いくら幸せになりたいとはいえ、“知り合つて間もない方の、そのまた知り合いの名称も聞いたことのない宗教のお話に、なぜ素直に耳を傾けることができたのかな？”と思いました。整理した結果、答えは一つでした。私は、入信をお許しただく前から、神様の存在を信じていました。まずはこのことに関するエピソードから、お話をさせていただきます。

入信を許される数年前、フリーターだった私は、コンビニでアルバイトをしておりました。そしてある日、私は過つてお店の備品を壊してしまいました。今ではあまりないことなのかもしれませんが、当時勤めていた店舗はかなり厳しく、備品に損害を与えた場合は、弁償しなければなりませんでした。この時点では誰にも気付かれていなかったもので、これ幸いと私は報告もせず、黙っていました。

しかしその翌日のことです。私は車のキーを失くしてしまいました。車がないと通えない場所へ勤めていたので、必死に探しました。しかし、鍵はどうしても出て来ません。結局諦めて鍵屋さんを呼んで合鍵を作ってもらったのですが、ここで私は心底驚きました。その鍵代が、私が弁償しなければならなかった備品の損害額と全くの同額だったのです。まさに明主様の「人の眼は偽り得ても神の眼は偽り得ずと知る人の幸」のお歌の通りのことが起きました。

このエピソードをきっかけに、目には見えない神様の存在を信じるようになり、些細なことでも報告・連絡・相談をす

るよう心がけるようになりました。

②「奇蹟」への道は楽な道ではない

話は戻りまして……その後「おひかり」を拝受し、正式に入信が許されました。その後は「道」などで感謝奉告させていただいた通り、お仏壇も用意させていただき借金も全額完済し、平山家のお墓も建てることができ、さらに霊界にいる家族全員の永代祭祀まで許されました。以前の私を考えますと、本当に十分過ぎるくらいの奇蹟をいただき、感謝してもしきれない気持ちでいっぱいです。死んだような人生を送っていた私でしたが、まさに“いのち”を救われたのでした。

このことを振り返る時、必ず思うことが一つあります。それは、神様は「奇蹟」はくださっても、「楽な道」は与えてはくれないということです。

私には入信当時三〇〇万円ほどの借金がありました。それを本格的に返し始めてから一年で完済することができました。しかし、神様は、何も現金を直接お与えくださったわけではありません。与えられたのは、早出・残業と副業（アルバイト）の出勤日数と勤務時間の増加でした。お蔭さまで周りの方の助けと毎日自分なりに一生懸命働いた結果、完済まで辿り着くことができました。

つまり逆に言えば、もし私が嫌になつて仕事を放棄したり、残業早出やアルバイトを断つたりしていれば、この奇蹟をいた

まとめ

だくことはできなかったということになります。入信を許される前のいい加減な私でしたら、もしかしたら逃げていたかもしれません。神様は、このこともお考えになられて私を早めに入信させ、段取りを組んでくださったのではないのでしょうか。

③与えられた「役割」に対して

そして最後に、入信から現在に至るまでを振り返り、私が感じていることは、“人は生まれた時から既に役割を背負っている”ということです。私に関して言えば、ひとつは「平山家の供養」だったのかなと思っております。私は、お墓を建てる話が初めて出た時、“なぜよりによって自分が”と思いました。

これを理解して受け入れられるかどうかは、“信仰をしているかどうか”だと思います。私は、お墓や永代祭祀に関しては、放棄しようと思えばできたことです。ただ、入信を許されてから、今ここに辿り着くまでに借金を完済することができ、先生方の厳しいご指導を受けながら、み教え拝読に取り組み、ご浄霊もいただいて……「平山家の供養は自分がやるしかない」と、だんだん使命感をもって取り組むようになりました。信仰を許されたからこそ、神様のお話に耳を傾けることができるようになりましたし、お墓の建立など霊的な働きに関しまして、素直に受けとめ取り組むことができたのかなと感じています。

①の出来事で神様を信じるようになり、②で借金を完済し、③で自分の役割を理解し始め、自分の家を供養をさせていた私ですが、ここまでの経緯でやはり感じることは、神様は“自分に何とかしてこの役目を果たさせよう”となさっていたんだなということです。そのために①、②、③の過程で私に力をつけさせてくださったのではないかな、と思います。理由までは分かりませんが、私が生まれる前から平山家の供養に私自身が携わることは、神様の方で決められていたことなのでしょう。

もちろん先に述べた通り、最初から最後まで素直に受け入れられたわけではありません。特に借金の完済前は“もう嫌だ、逃げたい”と思ったことが、何度もありました。しかし、神様は、それすらも見越されて、“それでもまあこいつなら大丈夫だろう”と思ってくださっていたのなら、こんなに誇らしいことはありません。

そして、私がこの度、聖地直結の会の職員として専従のご用が許されたのも、霊界の方で決められていたことなのかもしれない。大神様、明主様に救われたこの“いのち”を一杯、ご用にお使いいただきたいと願っております。

まだまだ未熟な私ではありますが、今後ともよろしくお導きのほどお願い申し上げます。

ありがとうございます。

草創期の先達

「大日本観音会」発会にさいして、政治的、経済的両面から、もつとも大きな貢献をした竹村良三は、教祖の誕生より半年ほど遅れて、明治一六年（一八八三年）の五月に、東京府北多摩郡狛江村（現在の東京都狛江市）の素封家・須田家の三男として生まれ、一五歳の時麹町三丁目の履物卸商・森田屋・竹村伝兵衛の養子となった人である。森田屋は天保二年（一八三一年）創業の、宮内省御用達の老舗であった。良三が初めて教祖に会ったのは、昭和四年（一九二九年）、孫の病気の浄霊が縁であった。教祖に心服して大本の信仰にはいり、以来、教祖とともに熱心に布教に努めたが、昭和五年（一九三〇年）七月、大森分院が完成するや、教祖は分院の管事、理事長は竹村、理事には正木三雄が就任している。昭和九年（一九三四年）、教祖が大本を脱退するや、教祖と行を共にし、やがて「観音会」創立とともに、教祖の要請を受けて会長となり、祭典の時には、衣冠束帯に威儀を正して齋主をつとめたのである。

当時、良三は麹町区の区会議員であり、また、麹町警察署管内の保安協会副会長をも兼務していて、社会的信用も厚く、

その存在は創立間もない「観音会」のために大きく寄与したのであった。さらに、和歌、俳句の会の常連として毎月出席するとともに、昭和六年（一九三一年）の鋸山の神事や、鹿島、香取両神宮の参拝に、妻・直子と共に随行するなど、教祖の旅には決まって同行している。

教祖と良三の関係は、信仰上のことばかりでなく、私事においても文字通り肝胆相照らす間柄であった。教祖はあまり酒は飲まなかったが、酒好きな良三とよく一緒に外で飲んで帰ることもあったし、また、密談と称して家人を退け、二人だけで“人情話”に打ち興じたこともあったという。

当時のことを良三の娘・偉子はつぎのように語っている。

「昭和四年（一九二九年）のころ、子供が病氣した時に、近所の山室さんが正木さんを紹介してくれました。正木さんは、“私よりもっと偉い先生がいらっしやるから”と言って、教祖様と二人でおいでになったのが最初でした。

教祖様が実業をされていて、小間物を三越に納めておられたころ、三越に三正会という会がありました。この会にはいる条件は大変厳しく、一〇人中、せいぜい二、三人でしたが、その三正会に岡田商店はいっていたのですから、信用は絶大だったわけです。それだけの事業をポンと投げ出して信仰の道にはいり、貧乏もなされたのですから、どう申し上げてよいやら、ともかく、普通の方ではない、思い切りのよい方でした。

観音会をお始めのころ、生活はあまりお楽ではなかったよ

うで、電話料が滞^{あやう}って電話を止められそうになったり、お
かずも納豆^{なっとう}とか目刺^{めぎ}しとかのこともありました。それでも、
教祖様も、奥様（二代教主）も、貧乏くさいところは微塵^{みじん}も
なく、超然^{ちょうぜん}としていらっしゃいました。

そのころ、私の宅と家族ぐるみ親しくさせていただいてま
した。ですから、教祖様はうちへ来られても、自分の家同様、
気ままに振る舞っておられました。黙って上がって、ごろり
と横になったり、夜遅く、『寝られないから。』とブラリとお
いでになることもありました。よく『鉢^{はち}かして……。』と言
われて、ゆかたの袖口^{そでぐち}から下がっている糸をご自分で切りな
がら、『うちの奥さんは、何もしてくれないからね。』と冗談
をおっしゃったりしました。けれども、祖父（伝兵衛）はや
かましい人だったので、この祖父がいる時は、さすがの教祖
様も「謹厳居士^{きんげんこじ}」（謹み深くきちんとしている人）でしたが、
私たちにはよく『あのじいさん、苦手^{にくて}だよ。』と言って笑っ
てられました。

教祖様のお好きだったものは、近所の秋元^{あきもと}という鰻屋^{うなぎ}の鰻
と、きよしという小料理屋の仕出しでしたが、きよしの主人
は武井良英^{たけいよしひで}という人で、後に観音会の支部長になった人です。
教祖が麴町より玉川へ移ってから間もなく、良三は観音会
の会長を辞し、「大日本健康協会」発会の時には、その顧問に
就任したが、その後は表立つことなく、陰からの協力を続け、
昭和三〇年（一九五五年）四月一四日に帰幽したのであった。

後に「天国大教会」の会長となり、教祖の高弟として教団
発展の礎^{いしずえ}を築いた中島一斎^{いっさい}（本名武彦^{たけひこ}）が神縁を得て入信し
たのは昭和七年（一九三二年）一月一日のことである。長女
の三保子^{みほこ}が疫痢^{えきり}に罹^{かか}り、四〇度の高熱を出し危篤^{きとく}に陥^{おち}ったの
がそのきっかけであった。中島は友人の話から、麴町で布教
をしていた正木三雄を知り、娘の命を助けたい一心で麴町分
所をたずねたが、正木の浄霊によって三保子の病状は好転し、
みるみる快方に向かつて、一週間ほどで全快したのであった。
この奇蹟によって中島の人生観は大きく転換した。三二歳の
時のことである。この時、命を救われた三保子は、後に、教
祖の次男・三穂麿の妻となった。

中島は明治三二年（一八九九年）、山口県萩^{はぎ}に生まれ、生
家は代々長州藩士であった。

中学を出てから母校の萩中学の代用教員を勤めた後、上京
して明治大学の商科に学んだが、病を得て郷里に帰った。そ
の後、下関の図書館員を振り出しに、鉱山会社、電力会社、
フォード自動車会社、ブリジストンタイヤというふうにはサラ
リーマン生活を続けた。ブリジストンでは若くして課長の地
位についたが、その心には常に一抹^{いちまつ}のむなしさが残り、何か
場違いの所に身を置いているような心がどうしても消えず、
昭和六年（一九三一年）にブリジストンを退職してふたたび
上京したのである。娘・三保子の奇蹟はその直後の出来事であ
った。

中島は娘の奇蹟に驚き、正木を介^{かい}して教祖に会うことになっ

た。こうして、中島の生涯は、自分自身予想もしなかった方向へ歩み出すことになった。教祖の話を聞くうちに今まで胸につかえていたものがみるみる氷解^{ひようかい}していった。そしてこの人についていく以外に、自分の人生はないと決意したのである。教祖は命がけのその意気に打たれて、即座に弟子^{でし}入りを許したのである。

中島はさっそくその翌日から大森へ泊まり込み、一週間の講習を受けて入信、専従者となった。しばらくの間、配布する新聞の売り上げが唯一の収入で、貧乏のどん底という生活をした。野原の土筆^{つくし}を摘んでおかずにするというような日もまれではなかった。

しかし、神は中島の信仰に大きな愛と力をもって応えたのである。

その中には長男・誠八郎^{せいはちろう}の奇蹟もあつた。三保子が疫痢^{えいそ}になる前のことである。誠八郎が壊疽^{えそ}（身体の一部が菌のために腐敗^{ふはい}するとされている）に罹^{かか}つたのである。初め、ぼつんとした小さなできものであつたのが、日増しに腫^はれがひどくなり、医者にみせたところ、

「すぐ切断しなければ手首まで広がってしまう。」

と言われ、右手の拇指^{おやゆび}を、第一関節^{だいいちかんせつ}のところから切断してしまったのである。まだ教祖を知る以前の話である。教祖は後にその話を聞き、

「惜しいことをした。生きたものが腐るということは聞いて

たことがない。生きてるものは絶対腐らない。」

と言った。だが、その切断した指は教祖の浄霊を受けているうちにやがて元通り回復し、しかも爪まで正常に生えてきた。両親はこの事実を見て、そこに神の大きな力の証^{あかし}を感じたのであつた。

中島は、井上らと違って、側近の奉仕ではなく、初めから布教の第一線に立った人である。神を求める情熱は、激しい布教へのエネルギーとなつてあふれ出た。とともに、疑問に思つたことは納得がいくまで教祖に教えを求めたのであつた。昭和七年（一九三二年）二月二二日の『日記』につぎのような一首がある。

中島氏道^{みち}の話に遅くまで語らひ分院に宿泊^{しゆくぱく}なしけり

中島は入信後間もなく、故郷の萩にあつた屋敷を売り払い、全額を教祖に捧^{ささ}げて、その苦しい経済を支えた。しかも、中島家では主人の一斎を先頭に家族全員がそろつて奉仕をしている。母と妹は教祖の麹町進出後、応神堂での家事^{まか}を任され、妻の暉世子^{きせこ}は二人の幼児^{おさなご}をかかえて新聞を配布して歩いたのであつた。文字通り一家をあげて教祖に信仰を捧げるとともに、一斎は伝道の使徒としての数多くの人材を育て、昭和二年（一九五〇年）一月、五一歳でその生涯を閉じたのである。



総合案内所近くに咲くヤマユリ



紫微宮から望む神山荘



紫微宮裏手に咲くアジサイ



MOA美術館ムア広場から相模湾を望む



夏空に咲き誇るサルスベリ



夏の瑞雲郷を彩るキョウチクトウ



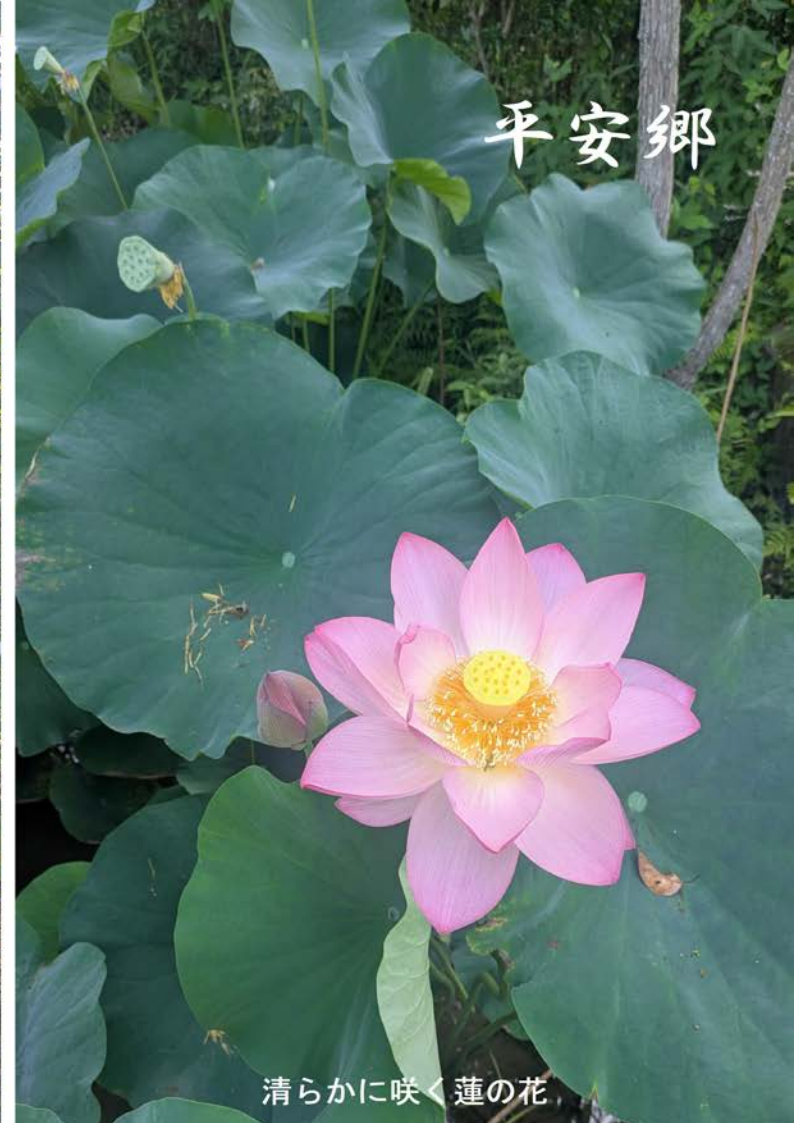
瑞雲郷の自然に親しむムクドリ



艶やかに育つ椿の実



涼しげに佇むキキョウ



平安郷

清らかに咲く蓮の花



夏の日差しにも負けず咲くヒオウギ



花びらを大きく反り返らせて咲くオニユリ

靈氣について（一）

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

明主様の食事観が一般的な栄養学と大きく異なる点は、「靈氣」という概念です。

靈氣は、靈の存在の認識や「靈主体従の法則」が前提となるため、これらに馴染みのない方へお伝えするのは少し難しいかもしれません。まずは、明主様のみ教えから靈氣の概念を学び、そのうえで現代社会に向けてどのように伝えていくかを一緒に考えていきたいと思います。

「今日の栄養学上、ビタミンがどうか、カロリーが幾許あればいいとかいうことは、実は、枝葉末節の問題であって、栄養の根本は食物の靈氣そのものにあるのである。しかし、この靈氣なるものは、試験管では測定できないものであるから、いかに研究しても今日の学問の程度では判らないのである。カロリーとかビタミンとか、蛋白とか、含水炭素とかいう物は、実は靈氣を取り除いた後の糟のごときものである。」

各項において細説したごとく、人間は靈と体で成り立ち、活動しているものであるから、食物も、その靈体

両方の栄養が必要なのである。あらゆる食物、それらもことごとく、靈体で成っているものであるから、新しい食物、すなわち新鮮な野菜、漁りたての魚ほど、靈氣を多分に含まれているのである。この理によって、食物の腐敗するのは、靈氣が放出するからである。食物にも靈氣保持期の長短があつて、穀類は一番保持期が永く、蔬菜類がその次であつて、魚が一番短いのである。これは腐敗の時間をみれば、能く判るのである。したがつて、新鮮な物ほど、靈氣が濃いわけである。しかし、干物にすれば、比較的長く保持されるのは、塩の靈氣を借りるためと、水分を抜くためとである。缶詰は、密閉して、空氣を遮断するため、空氣中に放散すべき靈氣が、保持されるからいいのである。

人間の精靈を養うには、食物の靈氣であり、人間の体を養う物は食物の体である。しかるに、人間の活力の根源は、靈氣の充実にあるのである。体の強弱は、実は、靈氣の充実と否とにあるのである。しかるをもつて、健康の根本は、靈の多量に含む物を食べばいい。さすれば、精靈の活力を益し、精靈の活力が増せば、肉体の強健を増すからである。かの各種の滋養剤のごとく精製されたものは、靈氣が発散して、稀薄になつているから、精靈を養う力はほとんどなくなっているため、なにほど、滋養剤を摂るといへども、活力は増さないのである。それよりもむしろ、新鮮なる野菜のごとき物を食す方が、ど

れほど賢明であるか知れないのである。

今日の科学は、霊を無視し、体のみによって研究されたものであるから、間違っているのである。最も判りやすい、例えば吾人、人間である。手足や五体が心を動かしているのではない。心が四肢五体を動かしているのであるのと同じ道理である。(後略)

(「日本医術講義録 第一篇」昭和10年)

このみ教えは、「真の栄養学」という題で知られています。明主様は冒頭で「栄養の根本は食物の霊気そのものにある」と断言されています。そして「人間は霊と体で成り立ち、活動しているものである」と霊主体従の法則を説かれ、「あらゆる食物もことごとく霊体で成っている」と、食べ物にも霊と体があることを明確に示されています。さらに、「人間の精霊を養うのは食物の霊気であり、体を養うのは食物の体である。そして人間の活力の根源は霊気の充実にある」と教えられ、私たちの活力を生み出す根本は食べ物の霊気であることをお示しく下さいました。そのうえで健康の根本として、霊気を多く含むものを食べることで精霊の活力が増し、肉体も強健になると説かれています。

霊気を多く含む具体例としては、新鮮な野菜や獲れたての魚が挙げられています。また、霊気の保持期間には長短があり、穀類が最も長く、野菜がその次で、魚が最

も短いと具体的に示されています。

私たち瑞雲では、この霊気を「生命力」とも捉えています。それは「いのち」を生み維持する力「ケガや病気を治癒する力」「生き続ける力」「子孫を残そうとする力」であると理解しています。

現代では、豆やお米などの穀類は、数千年前のものであっても発芽することが分かっています。このことから、お米のご飯を主食とし、季節の野菜や新鮮なお魚を副食とする昔ながらの日本食こそが、健康の源であると深く納得できます。

日常生活の中では、どうしても栄養素やカロリーといった数値に目を奪われがちですが、これからは「霊気」という食べ物の真の力を意識した食生活を取り入れていきたいものですね。



水晶殿に生けられたグラジオラス



貝殻とヒトデ

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1 階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 99 2026年8月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

